

大理小旅遊 ■ 最終回

# 大理今天也下雨

## 大理は今日も雨だった……

10月2日(土)

バッドさんが寝込んでしまった。昨夕、洱海(アールハイ)探検から帰って以来、猛烈な下痢が続きずっとベッドの中。ときどきミネラルウォーターで喉の渇きを潤す程度で固形物は口にしていない。本人は「大丈夫だ」と言っているが、大事をとって寝かせておくことにした。ところが、昼過ぎになってパイロン君の体調もおかしくなり、バッドさんの横に潜り込んでしまった。

バッドさんの退屈しのぎに、中国旅行と「下痢」の話をお話した。中国を旅行中あるいは帰国後に下痢を経験する人が多い。バッドさんの知り合いにもいるようだ。生水を飲んだのではないか、食べ物が悪かったのではないか、食器が不衛生だったのではないか、などなど原因をあれこれと並べてみるが確定的なことはよくわからない。最後は旅の疲れと環境の変化からくる体調不良ということに落ち着いた。

私は中国にこれ10回ほど来ているが、幸いなことに一度もそういう目に会ったことがない。山奥の、日本に比べれば衛生状況は決していいとは言えない農村を訪ね、現地の食堂で食事をして

いるが、まったく平気である。そんな話をしたらバッドさん曰く、「本当は中国人じゃないの？」と。応えて曰く、「かもね」で大笑い。バッドさんも少し元気を取り戻したようだった。

10月3日(日)

昨日までとは違って変わって、朝から雨模様。バッドさんの容態は大分良くなってきているようだが、まだ本調子ではないようだ。パイロン君の方はずっと寝込んでままである。バッドさんとパイロン君には申し訳ないが、二人が寝込んでくれたお蔭で、この日1日、勝手気ままに本を読み、お茶を飲みながらとりとめもない話をしたり、散歩したり、久しぶりにゆったりとした時間を過ごすことができた。これぞ「休暇」である。

3日も滞在していると、この状況がわかってきた。宿の主人すなわちバーのマスターはフランス人で奥さんは中国人。と言っても正式の夫婦ではないようだ。名前を聞きそびれたので、「Mr. フレンチ」と「彼女」と呼ぶことにした。Mr. フレンチが経営するバーは、表通りに面し



謎の女性「ルーシー」曰く、「私は「自由」でいたいから結婚しない」と。後に、大理で会社を共同経営する女性実業家であることがわかった。中国では「剩女」(結婚しない女性)が社会現象になっている。それも高度成長の副産物かもしれない。

た母屋部分の1階がバーで2階がMr. フレンチ夫妻の住居になっている。入り口を入ると、右手の壁を背にしてコの字形にバーカウンターが設けられ、その部分は天井まで吹き抜けになっている。入り口の正面に中庭を見ることができ、カウンターの中央側に7、8人が坐れそうなソファアール席がL字型に設置されている。左手にはカウンターと向かい合う形で、5、6人が坐れ

そうな小ぶりのソファアール席が2つ並び、その頭上は口フトになっていて、入り口を入ってすぐ右手に口フトに上る螺旋階段が設けられていた。

吹き抜け部分には、竹と和紙でできた大振りの行灯のような照明装置が3個、天井からぶら下げられていて、民家の古い柱や梁と調和して洒落た雰囲気を出していた。左手側の小振りのソファアール席の背後の壁には鮮やかな色彩の前衛的なイラストが描かれていた。数年前、ふらりとやってきた日本人が吹き抜け部分をデザインして自ら制作し、前衛的なイラストはポーランド人がペイントしてくれたのだとMr. フレンチが教えてくれた。Mr. フレンチもアーティストで、西欧の物質文化に疑問を感じてここに来たのだと言う。大理にはそういう外国人がたくさんいるらしい。

10月4日(月)・5日(火)

朝から雨。気温も大分下がり肌寒さを通り越している。バッドさんとパイロン君は食欲を取り戻し、朝飯代わりにほっかほかの包子(パオズ)を食べに行った。帰りに薬屋に立ち寄り、下痢止めの薬を購入。宿に戻ると、「彼女」がルンルン気分ではしゃいでいた。「ご機嫌だね」とパイロン君に耳打ちすると、「○○○○」の一言。一瞬、耳を疑った。「知らなかったの？」とパイロン君。そんなもの知るわけないだろう！

ここにはいろいろな人がやってくる。常連さんは、チベット僧、アクセサリー作家のポーランド人、正体不明の中国人女性、アニメ好きの中国人青年である。われわれが滞在中にフランス人親子、元ベド杯トレーナーと称するアメリカ人がそれに加わった。チベット僧をわれわれは「ムンク」、アクセサリー作家のポーランド人を「Mr. ポーリッシュ」と呼ぶことにした。正体不明の中国人女性は自ら「ルーシー」と名乗り、アニメ好き青年は「劉さん」と名乗った。いずれも大理の出身である。

ムンクは朝9時過ぎにやってきて、バーの軒先に音楽CDを並べて売っていた。どこから仕入れてきたのかわからないが、クラシック、ジャズ、ポ

ピュラー、すべて中古の輸入もので、中には60年代の曲を納めた代物もあった。人民路は日を経るごとに観光客が増え、宿の前も人の往来が絶えない。その多くが若い女性のグループで、大理古城の地図を片手にワイワイと賑やかである。その姿を見て、40年前の「アンノン族」を思い出した。「中国版アンノン族」の出現は中国の経済成長が裾野を広げていることによるの証しだろう。残念ながら、ムンクのCD売りは好景気の波に乗り損ねたようだった。

Mr. ポーリッシュは、ムンクがCD売り場を整え終える頃、中国人の彼女と連れ立ってやってくる。バーの入り口の右側がムンクのCD売り場で、左側がMr. ポーリッシュの手作りアクセサリー売り場だった。材質はわからないが、細いながらもしっかりとした強さの糸を器用に素手で帯状に編み上げ、それに色とりどりの玉を織り込んだり、ぶら下げたりしてネックレスやブレスレット、アンクレットなどを作っていた。夜になると、バーの客の求めに応じて特製のピザを焼いて人気を集めていた。

Mr. ポーリッシュは東ドイツで生まれた。ベルリンの壁崩壊とともに東ドイツを無一文で追い出され、ポーランドに戻ったがポーランドも社会体制が崩壊。安住の地を求めてあちらこちらを彷徨い、5年前に大理に住み着いたのだそう。アメリカの拝金主義、物質主義を批判し、「中国に自由はないが、大理には自由がある」と言っていた。彼にとつて大理は住み心地がよいのだろう、彼女との結婚を考えているとも言っていた。

20世紀後半に起きた東ヨーロッパ社会の崩壊はさまざまな価値崩壊を生み出したようだ。Mr. フレンチもMr. ポーリッシュも現代の「ポスト・ジェネレーション」なのかもしれない。

10月6日(水)

雨は上がったが、どんよりとした雲に覆われた1日だった。ようやくバッドさんもパイロン君も体力と気力を回復したので、昼間、ムンクの案内で近郊の農村へ出かけた。

夜、アニメ好き青年の劉さんご招待の晩飯を堪能。劉さんは鉄工会社に勤めながらアニメ作家を夢見ている。日本のアニメはすばらしいと言いつつ、中でも宮崎駿を尊敬し、日本に行きたいと言っていた。日本のアニメ文化は捨てたものではないぞ。思い切つて、「日本をどう思っているのか」と聞いてみた。劉さん曰く、「戦争は一部の人が起こしたもので、日本人の責任ではない。今、中国で騒いでいるのは一部の人間だ」と。

晩飯の後、面白いところへ連れて行くと言うので付いて行くと、そこはなんとカントリーミュージックのライブをやっている酒場だった。中国で



パイロン君とバッドさんのために「彼女」が下痢止めの伝承薬を処方してくれた。

アメリカのカントリーを、それも片田舎の大理で聞くとは思ひもしなかった。店の中は白人系の人たちが超満杯。路上に設けられたテーブルにも人が溢れていた。喧嘩と熱気。ロングヘアにパンダナ、絞り染めのTシャツにジーパン、これはどこか見たような……。さすがにアフロヘアはいなかったが、70年代の「ヒッピー」がここにいた。10時過ぎた頃、ルーシーがわれわれを探して現れ、ムンクまでやってきた。そのまま合流。劉さんが店内で白酒(バイジョウ)を買ってきて、みんなでこっそり乾杯。隣り合わせた中国版アンノン族も巻き込み、再び三たびの乾杯。バッドさんとパイロン君はこそとばかりに「ナンパ」に励んでいた。Mr. ポーリッシュの言、「大理には自由がある」を思い出した。

10月7日(木)

朝から雨。バッドさんとパイロン君を残して、私とサマンサさんは昆明に帰ることにした。ゴールデンウィークの最終日であり、昆明便はどれも満席だろうと予想していたので、7時半に代理店を訪ねたところ、午後の1便に1席だけ空きがあった。サマンサさんに申し訳ないと言つて、「イツォーク」と言つて、一人でバスターミナルへ向かった。12時過ぎ、私も二人に見送られて大理を後にした。別れ際、「なにかあったら必ず電話しろ」と、一人旅を気遣ってくれる優しいバッドさんとパイロン君だった。

「下痢」と雨に祟られた国慶節休暇ではあったが、なんともスリリングで、愉快で、不思議な小旅行であった。(この項終わり)